

『書譜』の注釈5： 執使用転の説および王書の価値について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教育学研究所 公開日: 2023-10-31 キーワード: 作成者: 廣瀬, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000117

『書譜』の注釈5

— 執使用転の説および王書の価値について —

Annotations to *Shofu* 5: On the Theory of " Writing Position, Breathing, Curves, Balance of Force " and the Value of WANG Xizhi's Calligraphy

廣 瀬 裕 之 *

HIROSE Hiroyuki

はじめに

本稿は、次の四編の論文を承けるものである。

- ① 『武蔵野教育学論集』 第二号所収の拙稿「『書譜』の注釈1」2017
- ② 『武蔵野教育学論集』 第五号所収の拙稿「『書譜』の注釈2」2018
- ③ 『武蔵野教育学論集』 第九号所収の拙稿「『書譜』の注釈3」2020
- ④ 『武蔵野教育学論集』 第十一号所収の拙稿「『書譜』の注釈4」2021

全訳については、すでに藤原楚水・田邊古邨・西林昭一氏など先達の優れた先行研究がある。西林氏の『書譜』解題によると、六篇に分け各篇の主旨を次のように記している。

「第一篇 王羲之を典型とする四賢の優劣論、第二篇 書の本質と価値、第三篇 六朝時代以来の書論、第四篇 執使用転の説および王書の価値、第五篇 書表現の基盤と段階、第六篇 書の妙境と批判、跋 語 「書譜」著作の趣旨」

本稿「『書譜』の注釈5」は、上の一覧の第四篇「執使用転の説および王書の価値」に注釈を加えたものである。

本稿は、台北の故宮博物院蔵の墨書本（卷子本）を書者の孫過庭自身が当時、揮毫したと思われる紙面ごとに、章立てしているが、本稿で扱う第12紙は、かなり欠損している。そこで欠損した行の箇所は、現存する刻本（拓本）によって増補することとした。西林氏によると、「書譜の刻本は北宋時代の太清樓帖本など十余種あり、また、刊本には南宋の陳思『書苑菁華』ほか十数種がある」と記す（中国書法選38「書譜」解題による・二玄社[2008]）。本稿では、刻本の「薛氏本」を用いて、「墨書本」と文字の大きさをほぼ同寸に撮影して、かつ一行の寸法を墨書本と同寸にした台紙を作り、そこに「薛氏本（拓本）」写真を、剪装本を制作するごとく行ごとに切って貼り合わせていくことによって、欠損した墨書本のページの各行の様子を推定したものが次の図版である。欠損

行目

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

又云々傳伯英同學形乃
更之新者延美指倅末伯英

漢末伯英下少一百六十餘字

時代之至亦如
接必之云人同

福一史傳何之
子象此訓此

種且從其未探其心
之四達不

勿忠於名言之所以通
為難

形於孤墨粗可特掃其狀

獨紀其意之存其所以
希責以

之云其境之形而末求
時徑

物求之其極執其用轉之由

200

199

198

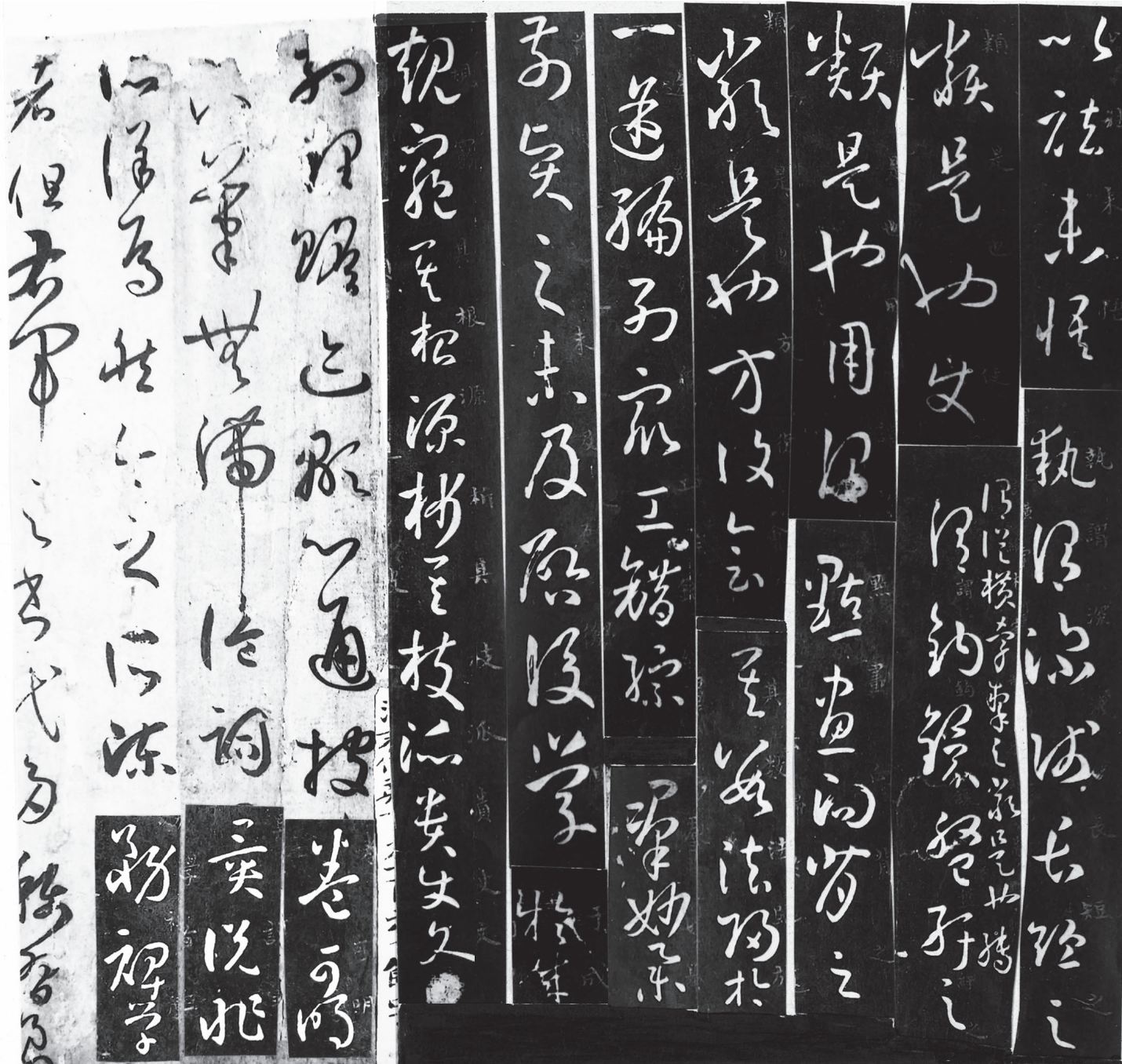
197

196

195

194

193



したページの行数は、今回の試みによって復元を試みた結果15行となった。

本稿は第四篇について先賢の先行研究を参照しつつ、更に判りやすい口語訳に努め、高等学校芸術科書道の書論の単元の授業で扱うためのポイント（要点等）を各紙冒頭に記したものである。

第12紙の範囲について

前号までに現存する墨書本第12紙は二行目（185行目）までしか存在しないので、失われた箇所を刻本で増補した。本稿は、内容が第四篇となるその続きから開始したものである。本来あったと推定されるが欠損して無くなり拓本で補った第12紙三行目（185行目）から同紙十七行目（199行目）までの、15行分をここでは「第12紙 D《別紙補》」と呼ぶこととする。

	冒頭	最終行	行数
第12紙	C	183	2
	*二枚に切れている		
	D	《別紙補》	15
		ゆえに合計	17
第13紙		200	215
第14紙		216	231
			16
			無
			無

第九紙以降、年代を経た紙の劣化等で傷んだ箇所が多くなる。本稿は、本文の内容上、第12紙D《別紙補》の途中（刻本による増補の3行目）からはじまる第四篇から始めることとする。

次に「第12紙（ここではD《別紙補》）」の第四篇中のキーワード

となる語を記す。

〔ポイント1〕 **不易盡名言**（名言に尽くし易からず）

的を射た言葉として説明するのは簡単ではない。西林氏は、「名言」は文字の意とする。

〔ポイント2〕 **難形於紙墨**（紙墨に形し難し）

言葉で通じることとも紙に書いての文章では表現しにくい。

〔ポイント3〕 **希夷**

言外微妙な道理のこと。出典は『老子』贊玄第14に「これを視れども見えず。名づけて夷と曰ふ。これを聴けども聞えず。名づけて希と曰ふ。」とある。章題の「贊玄」とは「奥深い道をほめたたえる意。この章は道が人間の感覚では捕らえられず、時間的・空間的には無限であり、万有を支配する偉大な存在である旨を説いている」という。ここでいう夷とは「影も形もないもの」、希とは「音声のないもの」をさす。

〔ポイント4〕 **取會佳境**（會を佳境に取る）

「會」はかなめ・要点の意。取會は、興趣（おもしろみ・おもむき）を理會（道理を会得すること）する意。藤原氏は、「よいところを見てこれを味い楽しむこと」とする。

〔ポイント5〕 **執・使・転・用**

「執・使・転・用」とは、藤原は「書法の上で達筆に関する専門語である」とする。『執』は執筆のことで筆を執るとき深い浅いをいう。『使』は運筆のことで筆画を運筆する呼吸を指す。

『転』について藤原氏は、「周旋・廻旋・転運等で、筆の方向を換える如き」こといい、西林氏は、さらにわかりやすく「草書などを書くおりに用いる曲がりくねりをさす」と説く。『用』に

也。轉とは鈎環を謂ひ、盤紆の類是れ也。用とは點畫を謂ひ、向背の類是れ也。方に復た其の數法を會して、一途に歸し、衆工を編列して群妙を錯綜す。前賢の未だ及ばざるを擧げ、後學を成規に啓き、其の根源を窮め、其の枝派を析つ。

・まず、執使用轉の由来について述べ、まだ基本を理解していない人たちに啓発しておきたい。執とは、筆を執るときの深淺をいい、筆を執る位置を長短にする類を表す。使とは縦・横の筆画を運筆する呼吸を表し、筆鋒を進めたり引きとどめたりすることである。轉とは、草書を書く折に用いる曲がりくねることを指し、ぐるぐるとめぐり屈曲する運筆のことである。用とは、点画のことを言い、向背のたぐいのことである。さらにまた、これらの方法を総合して書法の原理に帰着させ、もろもろの技法を系列化し、種々の妙趣をませあわせ、先賢がいままで説き及ばなかったことを挙げ、後學者のために伝統的な書法を啓発し、書の根源をつきつめ、種々の流れを分析してみたい。

歸於一途^一一つに帰着。(●ポイント7) 参照。

衆工^二「衆」は多くのこと。もろもろ。「工」はわざ。技芸。技法。

錯綜群妙^三錯綜は入り交じえる意。多くの妙趣をあつめ、ませあわせること。

第13紙

この本文200行目から再び「第13紙」として継がれた墨書本がまた現存する。「第13紙」のキーワードとなる語を次に記す。

(●ポイント8) 文約理贍

文は文章、約はつづまやか。むだを省いて切り詰める。要領を得てあつさりしているさま。簡素の意。理は道理、贍はセン(セム)。たりの(たる)。じゅうぶんである。豊かなこと。藤原氏は、「文章は簡明にし道理は豊富」と訳す。

(●ポイント9) 詭詞異説

詭異なる(まともでない)言葉や、変わった説。

(●ポイント10) 指歸

おもむき・歸する所の意。根本となる考え・思想。すべての者の従うべき模範。藤原氏は「最後の帰着点」とする。

(●ポイント11) 會古通今

古を理解して今に通じるという意味。

(●ポイント12) 摹搨

双鉤にとり、墨で埋めて模写したもの。

(●ポイント13) 歴代孤紹

歴代に一人伝わってきたことを表す。ここでは、王羲之の書の血脉のみが伝わってきたことを指す。

(●ポイント14) 怡懌虚無(虚無に怡懌す)

怡懌は、よろこぶ。よろこびの意。道家の無為にして楽しむ境地。

第12紙墨蹟本2字目末尾に

補「漢末伯英下少一百六十六余字」という小さい張り紙がある。

・刻本を剪装本にしてみたが真蹟本にない増補したこの箇所は確かに166字である。

指歸Ⅱ〔●ポイント10〕参照。

⑤豈に唯だ古に會し今に通ずるのみならんや。亦た乃ち情は深く調合せり。摹搨をして日に廣く、研習をして歳に滋さしむるを致す。先後の著名は、多く散落到に從るに歴代孤紹せるは、其の効に非ずや。

・なんと、ただ古の書法を習得して今の書法に通じているというだけではないことか。その情趣と格調も自然に合致しているからである。ゆえに人々に日に日に模写され、年ごとに研修するものが増える結果となったのである。王羲之と前後する名のある人の作品も多くが散逸してしまっているが、彼一人が学ばれてきたのは、その効力によるものであると考える。

孤紹Ⅱ〔●ポイント13〕参照。

⑥試に其の由を言ひ、略ほ數意を陳べん。止だ《樂毅論》《黃庭經》《東方朔畫贊》《太師箴》《蘭亭集序》《告誓文》の如きは、斯れ並びに代「世」俗の傳る所にして、真行の絶致なる者也。《樂毅》を寫せば、則ち情、佛鬱すること多く、《畫贊》を書すれば、則ち意、瓌奇に涉る。《黃庭經》は、則ち虚無に怡懌す。

・試みにその理由について、いくつか見解を述べたい。ただ王羲之の作品中、《樂毅論》《黃庭經》《東方朔畫贊》《太師箴》《蘭亭集序》《告誓文》は、いずれも世間に伝えられていて、楷書と行書の極致を示す作品である。《樂毅論》を臨書する

と、感情の高まりがある。《東方朔畫贊》を書くとき、意識（こころ）は、すぐれて立派な趣をめぐり歩ける。《黃庭經》には無為にして楽しむ境地がある。

止だⅡただ・わずかに。

《樂毅論》Ⅱ小楷の法帖。三国魏の夏侯玄が戦国時代の武将樂毅の王道に則って戦った精神を説いた文章を書いたもの。

《黃庭經》Ⅱ小楷の法帖。道家の經典の黃庭外景經を書写したもの。

瓌奇Ⅱ瓌は魂の別体。すぐれて立派の意。

《東方朔畫贊》Ⅱ小楷の法帖。漢時代の東方朔の画像に題した贊。

《太師箴》Ⅱたいししん・三国魏のこう康の文章を王羲之が楷書で書いたものと

言われる。

《蘭亭集序》Ⅱ蘭亭序のこと。

《告誓文》Ⅱ羲之が政争から病を理由に官から退いた時、感懐を先祖につげ、再度政治にたずさわらぬと誓ったもの。

代「世」俗Ⅱ太宗の諱を避けた。

怡懌虚無Ⅱ〔●ポイント14〕参照。

第14紙

〔●ポイント15〕思逸神超

心が世俗を超越していること。

〔●ポイント16〕駐想流波（想を流波に駐む）

琴の名人であった伯牙が弹奏の意味を聞き知ってくれていた鍾子

貽^{II}のこす（後にのこす）・おくる（人に物を贈る）。

睢^{II}すい^{II}くわん（すいかん）。川の名で、睢水・渙水のこと。あわせて澮水と
いう。

⑧其の目撃して道存すと雖も、尚ほ或は心迷ひ議は舛^{そむ}く、強ひて名づけ體と為し、共に習ひて區を分かつたざるは莫し。豈に情の動きて言に形わるるは、風騷の意に取會し、陽に舒び陰に慘^だむは、天地の心に本づくものなるを知らんや。既に其の情を失はば、理は、其の實に乖^{そむ}く。夫の致^きむる所を原^たぬるに、安んぞ體有らんや。

・目で一瞬見ただけで本筋がわかるとはいつでも、心に迷いを抱きながら（あれこれ）議論が分かれる。ことさら型を限定し、同じものを習いながら区を分かつ（一定の枠にはめられるような書ではないのに無理に規定化しようとする）のはどうしたところか。どうして感情（感動）がそのまま言葉となってあらわれるのは、詩経や楚辞のような詩意を取り入れるように陽気な日にのびやかに、陰気な日にちぢむのは自然の道理であることを知らないのか。すでにこのような感情を失ってしまったら、この論理は、真実とはいえない。王羲之の到達した境地をたずね探つていけば、どうして類型された型などあるのか。（あるはずがない。）

舛^{II}セン・そむく・行き違う。互い違いになって乱れる意。「舛」は6画の漢字

であり、部首としては「ます・まいあし」。

豈^{II}あに・どうして。

慘^{II}いたまし（心がいたむさま）・いたむ（刺すように痛くする）・むごし（残

忍なさま）。

原^{II}たづぬ・物の根元をたずねる。

まとめ

今回、孫過庭が揮毫した当時の紙の継ぎ目の位置を考証してから進める必要が出てきたことは先に述べた。紙の損傷がない第1〜8紙までの行数を基に、後半の損傷の多い部分の、破損して切れる前のもとの用紙の姿を推定しつつ刻本で補うことによって、失われた箇所のかつての真蹟本の姿を推定し復元することが出来た。

この章では、王羲之の作品名がいくつも出てくるが今日ではあまり見られないものが含まれている。

参考文献

- ・藤原楚水『註解名蹟碑帖大成』下巻 1977年1月 省心書房
- ・中田勇次郎編『中国書論大系』第二巻唐I 1977年12月 二玄社
- ・西林昭一訳『書譜』右書に所収
- ・西林昭一『書譜』 昭和47年10月 明德出版社
- ・中国法書ガイド38『書譜』唐孫過庭 1989年12月 二玄社
- ・中国法書選38『書譜』唐孫過庭 1990年12月 二玄社
- ・田邊古邨『田邊古邨全集』第一巻書籍〔二〕 平成28年2月 芸術新聞社

・飯島春敬編『書道辞典』
昭和51年3月 東京堂出版
・阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫
新釈漢文大系第7巻『老子・莊子（上）』
平成5年6月 明治書院